

第23回川崎市文化芸術振興会議会議録（摘録）

- 1 会議名 川崎市文化芸術振興会議
- 2 日時 平成22年10月5日（火）
午後6時から午後8時10分まで
- 3 場所 第4庁舎4階 第4会議室
- 4 出席者
 - (1) 委員 澤井委員（会長）、垣内委員（副会長）、岩森委員、城谷委員、野畑委員、林委員、廣瀬委員、星川委員、渡辺委員
欠席委員：前田委員
 - (2) 事務局 市民・こども局市民文化室
野本室長、村石担当課長、服部課長補佐、植村職員
浜田担当部長、石川担当課長、三瓶担当課長
- 5 議題
 - (1) 平成22年度文化アセスメント対象事業の概要について
 - (2) 平成22年度文化アセスメント対象事業実地調査の報告について
 - (3) 今後のスケジュールについて
- 6 公開・非公開の別 公開
- 7 傍聴者 0名

【審議内容】

事務局 過半数の委員の出席により、川崎市文化芸術振興会議規則（以下「振興会議規則」という。）第4条第2項の規定に基づき会議の成立を報告する。配布資料については、事前に議題資料2-2、2-3及び参考資料1を送付した。本日、追加資料として議題資料1及び議題資料2-1、参考資料1の追加分を配布し、併せて会議次第の差替えをお願いする。審議前に、川崎市が協力し、政策研究大学院大学が実施した「川崎市における『音楽のまちづくり』の評価に係る調査研究」について、垣内委員から報告をお願いしたい。

垣内委員 川崎市は2004年から音楽のまちづくりの取組を進めてきた。川崎市や川崎市文化財団（以下「文化財団」という。）の協力を得て2008年度から2009年度にかけて大学で調査を行った結果をまとめたので紹介する。調査は20歳以上の川崎市民、隣接する大田区・横浜市鶴見区の方へのインターネット調査と、市民や関連する音楽教育機関、音楽団体、その他経済関連団体へのアンケート及びインタビ

ュー調査を実施した。定量的、定性的調査を踏まえ、その分析により政策的な提言を行った。

音楽のまちづくりの認知度は市全体で約 54 パーセントで、音楽のまちづくりの効果については半数以上が肯定的な効果を感じている。特にイメージアップの効果が、市外の人も含め非常に強く感じられている。市全体で約 76 パーセントの人が今後も音楽のまちづくりを何らかの形で継続してほしいとしており、研究者として住民のコンセンサスは得られていると結論づけた。

ミュージア川崎シンフォニーホール（以下「ミュージア」という。）については、認知度と鑑賞経験、鑑賞希望を調査した。認知度は市全体で約 61 パーセントと比較的浸透しているが、区によって差があった。鑑賞経験は市全体で 15 パーセントで、決して低い数字ではないが、地域差が大きく、是正する必要がある。鑑賞希望は非常に高く、川崎の魅力になっているという人も多く、ミュージアに対する期待は非常に大きい。北部地域でも鑑賞希望は高く、市内の他の文化施設との連携や東京交響楽団との協働が重要となる。

また、企業や団体も「音楽のまちづくり」に非常に関心を持っており、今後も協力したいという意向を持っていることがわかった。東京交響楽団の活動も評価されており、もっと活動してほしいという意見が大変多く、東京交響楽団との連携ができてくれば、政策的により良いものになる。

今回はインターネット調査であったため若い世代の回答が多いが、音楽鑑賞経験などの一部の項目では若い世代の数字が低い。調査結果の数字は控えめではあるが、認知度や評価も高く、要望も多いと考えられる。

- 事務局 それでは、振興会議規則第 4 条第 1 項の規定により、澤井会長に議長として議事進行をお願いしたい。
- 議長 第 2 3 回川崎市文化芸術振興会議（以下「振興会議」という。）を開会する。平成 2 2 年度文化アセスメント対象事業の概要について、事務局から説明をお願いしたい。
- 事務局 平成 2 2 年度文化アセスメント対象事業は、「アートのみちづくり事業」と「地域文化のみちづくり推進事業」である。「地域文化のみちづくり推進事業」の概要や趣旨を映像のみち推進担当課長から御説明する。
- 担当課長 議題資料 1 により「第 16 回 KAWASAKI しんゆり映画祭」について説明する。日本映画学校の故今村昌平監督が第 1 回から関わり、地域おこしとして始められた。今回は 10 月 9 日（土）から 10 月 17 日（日）までの 9 日間、ワーナー・マイカル・シネマズ新百合ヶ丘及び川崎市アートセンターのアルテリオ映像館・小劇場で開催し、短編を含め 33 作品の上映を予定している。
- 澤井委員 主催者の NPO 法人 KAWASAKI アーツは、この映画祭以外にも事業を実施しているのか。
- 担当課長 麻生区新百合ヶ丘には文化芸術に関係する方や学校などが多く、そういった方々が集まって実行委員会を構成し映画祭を実施していたが、彼らが NPO 法人 KAWASAKI アーツという団体を作った。映画祭を実施するのが団体の主な事業となっている。
- 城谷委員 同じく文化アセスメント対象事業である「アルテリッカしんゆり」も同じ団体

が主催しているのか。

- 担当部長 「アルテリッカしんゆり」は実行委員会により実施されている。
- 澤井委員 財源の国庫支出金は、文化庁からの映画祭用の補助金があるのか。
- 事務局 主催者が日本芸術文化振興会から助成金を得ており、市は受けていない。市は当初まちづくり交付金の助成を考えていたが、結果的に交付金は受けられなかった。
- 林委員 入場料収入は何パーセントぐらい占めるのか。
- 担当課長 事業全体の予算が約 1500 万円で、そのうち入場料収入は約 180 万円（12%）である。
- 林委員 動員数の約 2000 人は少ないのではないか。動員数の目標値はどれくらいか。
- 担当課長 今年度の目標数は_____人。アートセンターの映像館は 113 席で、ワーナー・マイカル・シネマズ新百合ヶ丘に使用料を支払って借りている劇場は 280 席であるが、平日の昼間に上映しているものもあり、満席までは至らない。
- 林委員 開催時期について、この時期は平日に動けない人がほとんどではないか。
- 担当課長 麻生区民祭やしんゆりオリーブまつりなど他のお祭りと併せて、また芸術の秋ということもあって地域一帯で楽しむため、この時期に開催している。
- 垣内委員 2010 年度の予算費目は。また、議題資料 1 の「開催地域等にふさわしい予算を目指す」とはどういうことか。
- 担当課長 市の予算は市民・こども局から負担金として 900 万円、野外上映会が麻生区の事業として位置づけられているため、区から 90 万円が支出されている。常に映画上映を行っているアートセンターが出来たため、しんゆり映画祭の位置づけやアートセンターなどの地域の文化資源を活かしたあり方を、予算を含めて検証していく必要がある。
- 垣内委員 具体的にどのような違いを考えているか。
- 担当課長 映画祭は、上映作品を市民ボランティアによる選定委員会の意見を取り入れ、主催団体代表の白鳥あかね氏などにより全体のバランスを考えて決めている。幅広い年代層に向けた作品を上映している。ボランティアの登録は 20 人程度。
- 星川委員 川崎区の住民としては、当初から北部の映画祭というイメージが強い。参加者は宮前、多摩、麻生区のほか東京の方に限られるのではないか。
- 担当課長 南部でも広報を行っているが、参加者は少ない。
- 渡辺委員 中原区には市民ミュージアムやスポーツ施設があるが、それを各区に作る訳にはいかない。同じ芸術でも各区がそれぞれの特色を活かしていくべき。
- 野畑委員 作品数が多すぎる。
- 林委員 各作品 2 回の上映は、作品数が多い中では非効率。
- 澤井委員 「映像のまち・かわさき」との関係は。
- 担当課長 「映像のまち・かわさき」は、映像を活用した人材育成、地域の活性化を大きな柱として取り組んでいる。人材育成は、小学校の授業での映像制作を行っている。全国に先駆けて始まったしんゆり映画祭のジュニア映画制作ワークショップが元になっている。一昨年 1 校、昨年 3 校、今年は 10 校が制作している。
- 渡辺委員 以前実施されていた「地方の時代」映像祭はコンクールだったが、その後どうなったか。

- 事務局 川崎市民プラザを中心にして、2001年度まで開催され、ドキュメンタリーやニュースを上映していたが、現在は会場を移しながら行っている。当時のフィルムは市民ミュージアムに保管されている。
- 垣内委員 「アートのみちづくり」と「映像のみちづくり」の役割分担は、ほぼ同じ場所で行われ、「アートのみちづくり」の中にメディア芸術もある。
- 担当部長 「アートのみちづくり」は芸術文化を活用したみちづくりであり、「アルテリッカしんゆり」は、地域一帯の様々な文化的資源全てを総括し、活用して芸術によるみちづくりをしようとするものである。音楽や演劇をはじめ、今年度は落語などを加えて総合芸術祭としてアートセンターなどを活用しながら開催している。アートセンターは、総合芸術祭の中の1つの映像部門の役割を担っている。一方、「映像のみちづくり」は北部だけではなく市内のすべての映像資源を活用し、市全体を映像のみちにしていこうという事業であり、北部の1つの事業として「KAWASAKI しんゆり映画祭」が位置づけられる。
- 渡辺委員 映像も音楽に関係したものに特化すると、コンセプトが明確になり、無駄がなくなる。
- 議長 次に、平成22年度の文化アセスメント対象事業実地調査の報告について、説明をお願いしたい。
- 事務局 「アルテリッカしんゆり」について、議題資料2-1が暫定版の文化アセスメント調査・評価シート、議題資料2-2が委員からの実地調査の報告である。他に演目ごとの入場者数を示した来場者数一覧表を配布した。調査・評価シートには行政の評価を記載しており、今後はマニュアルに基づき振興会議による評価を作成していく。
- 議長 実地調査報告のエッセンスも含めて意見をいただきたい。今年は21,700人が来場し、昨年より1,000人の微増である。
- 岩森委員 駅前が工事中だったのが残念だった。プラカードを抱えたスタッフが駅前にいたため、スムーズに目的の場所へ行けた。演目の「リアル感電」は超満員で、アート系の若者が補助席まで使って熱心に鑑賞していた。
- 星川委員 入場券に小さく公演前に解説があることが書かれていたが、知らなかった人が多かったのではないかと。解説はパンフレットに書いてあることとあまり変わらなかった。制作に関わることなど詳しい解説であれば、事前に広報することにより多くの人が集まったのではないかと。
- 廣瀬委員 アート、映画、音楽のそれぞれについて、市民ボランティアの人たちが熱心に取り組んでおり、大変素晴らしいことだと思う。市が補助金を出しているが、本当に成果を上げているのか。取組自体は素晴らしいが、ミューザとの連携や洗足学園や等々力での実施など、ノウハウを活かした広がりが見受けられない。
- 城谷委員 こんにやく座のオペラを見た。多くのプログラムのうちの一部であり、いくつか見ないと評価が書きにくい。主催者は大勢の人に見てもらうために、出演者にも我が事としてどうすればお客さんを集めることができるかを訴えるべきだと思う。テレビに出ている有名な人たちには黙っていても観客は集まるが、メジャーな人たちを並べるなら必ずしも川崎でやる必要はなく、川崎の地で育てていく芽がないといけない。

- 林委員 狂言を観た。普通、狂言はあまり広くない能楽堂で見えるものだが、大きなホールだったので遠くの席からは見えなかったのではないかと。入場者は 455 人とあるが、6 割がたしか埋まっていなかった印象を持っている。
- 担当部長 定員 1,000 人のホールだが、狂言をきちんと鑑賞していただくため、当初から定員を 600 人にしぼり、通路から後ろと横を仕切った。
- 林委員 テープなどを張り、クローズしたことをわかるようにすると良かった。演じている人から見ると空席がある会場で演じるのはどうか。入場者は圧倒的に高齢者が多く、若い人はほとんどいなかった。せっかく地域で狂言をやるので、普段狂言を見ない人が見る機会になってほしい。冒頭に解説があり、タイムリーで時間も短くとても良かった。しかし公演自体が長く、プログラムに終了時間の記載も必要である。また、公演後にトークがあるとアナウンスがあったが、チラシにもパンフレットにも記載がなく、トークまで聞いた人は本当に少なかった。若い人に対するアプローチが足りない。小学生や中学生にも日本の伝統を見せるべき。
- 担当部長 市内で実施している「こども狂言教室」の子どもたちによる発表会を公演の前に実施し、家族など約 300 人が舞台を観た。地域で子どもたちに伝統芸能をしっかり学んで体験してもらうことにより、1 つの日本の伝統文化を伝えていく核とするため、文化財団が主催している。また、文化財団の主催で、夏休みに川崎区にある能楽堂を使って子どもたちが鼓笛など能について勉強した後、プロの方が演じる能を観てもらう機会を設けており、子どもたちに能や狂言の学習や鑑賞の機会を作っている。
- 澤井委員 国府弘子さんによるプログラムを観た。入場者一覧表によると 1,200 人を超えて最も入場者数が多かった。国府さんは川崎の出身で市民文化大使ということもあり、公演の中でアルテリッカ全体の趣旨も話していた。プロデュース能力もあり、非常に楽しめる内容だった。昭和音楽大学（以下「音大」という。）のオーケストラとジャズトリオのコラボレーションも良く、国府さんと指揮者が入念に打合せと練習をしていたようだ。ただ、公演時間が長く、終演時間が大きくオーバーしたことは問題。また、外国でこのような芸術イベントを実施する場合、統一テーマや全体の雰囲気が決まっていて、その範囲内で個々のプログラムが考えられるが、内容について出演者側に任せて個々のプログラムがバラバラにやっている。「アルテリッカしんゆり」の趣旨のひとつとしてジャンルや世代を問わない人たちが楽しめるということであれば、マッチしていたと思う。
- 垣内委員 東京交響楽団アンサンブルコンサートを観た。場所は音大のユリホールで、7～8 割埋まっており、比較的年齢層の高い女性が多かった。チケットは 2800 円と安い。技術的にも非常に高く聴き応えがあり、招待客も含め満席にしてほしかった。日曜日で駅前の広場は賑わっていたが、音大への道は人通りが少なく、音大も小さなチラシが貼ってあるだけで、もう少し大きく広報すると良い。また、最終日だったせいかお祭りのムードは全く感じられなかった。
- 林委員 天気も良い日の午後にこども広場へ行ったが、あまり人がいなかった。
- 担当部長 大人が楽しむだけではなく、子どもたちも楽しめるように、子ども会やボーイスカウト、ガールスカウトなど様々な青少年団体が協力して実施した。
- 澤井委員 実行委員会では最初の企画段階からプログラムについて議論しているのか。

- 担当部長 5月中旬に「アルテリッカしんゆり」が終わったあと、6月中旬から次年度の実施に向けて企画委員会が始まる。企画委員会は総合プロデューサーのほか日本映画学校、音大などの代表者で構成されており、おおよその演目を決定する。実行委員会は地域の方々など約50名で構成され、9月の第1回実行委員会で了解を得ている。実行委員会の事務局が具体的に企画や実演団体と交渉する。
- 渡辺委員 美術家の友人が、芸術祭であるが美術が1つもないと言っていた。あの地域に住む日本の第一線の芸術家の意識を反映させない手はないだろう。
- 澤井委員 「アート」というと、やはり美術系のイメージがある。
- 野畑委員 劇団民藝の「神戸北ホテル」を観た。民藝が川崎の黒川に移転してから28年経っていて、活発な活動をしている。入場者は年配の方が多く、若い方にも観てもらいたい。
- 林委員 総合プログラムの各ページに宣伝が入っているのは他ではあまりない。
- 担当部長 プログラムの作製費用は協賛金で賄っている。
- 林委員 各演目のスポンサーのように見えるので、宣伝は最後にまとめて入れるとよい。
- 議長 今後の振興会議の作業としては、評価を作成する。昨年度は2つの実施グループに分かれて評価作業を行ったが、今年度は2つの事業について、可能な限り全員が実地調査を行って、全体会議で評価を行う方法と、昨年度同様2つの実施グループで作業を行い、全体会議で確認する方法がある。昨年度の方法が効率的だったため、同様に進めたいがどうか。
- 委員 異議なし。
- 議長 では「アートのまちづくり」をA、「地域文化のまちづくり推進事業」をBとして、委員の希望により実施グループ分けを行い、Aが林委員、星川委員、廣瀬委員、野畑委員、Bが垣内委員、岩森委員、城谷委員、渡辺委員とする。所属は決まったが、これから実施される「KAWASAKIしんゆり映画祭」についても全員が実地調査を行い、報告を事務局へ提出する。報告をもとにグループで評価シートの作成について議論していきたい。
- 事務局 議題資料3のスケジュールを説明する。文化アセスメントの実地調査と評価作業を進めると同時に、来年度の文化アセスメントの対象事業の検討も進めたい。「アルテリッカしんゆり」の予算については、市が文化財団に補助金を支出し、文化財団が分担金として実行委員会に支出している。その用途は公演の実施ではなく、広報及び事務局経費に限定して使っている。公演については、各実施主体がそれぞれリスクを負担している。
- 議長 それでは、これをもって第23回振興会議を閉会する。

(会議終了)